



和田 誠

この人・この3冊

磯崎憲一郎・選

保坂 和志

①書きあぐねている人のための小説入門（保坂和志著／中公文庫／700円）

②残響（保坂和志著／中公文庫／660円）

③未明の闘争（保坂和志著／講談社『群像』2009年11月号より連載開始）

来年でデビュー二十周年を迎える保坂和志の、日本の現代文学における最大の功績は何といっても「猫が猫である（象徴や比喩ではない）」小説を歴史上初めて書いたことだが、それと同じか、もしかしたらそれ以上に大きな功績は「文体とは情報の構成・密度である」と言い切ったことだと私は思っている。文体、というとふつうは言葉使いの硬軟とかセンテンスの長短、会話文の多少の違いなどと思われ勝ちなのだが、小説の場合はそんな表面的なことではなくて、ひとつの場面を描くときに書き手が必ず行っている、何を書いて何を書かないかの取捨選択、更にはその抜き出した情報をどういう順番で、どのように再構成するかという「出力の運動」こそが小説における文体なのだ、と保坂は言っている。私は保坂和志と出会って初めてそういう考え方があることを知った。私の書く小説はその実践でもある。

①は小説家志望者向けの小説作法の入門書だが、右に書いたような文体や描写に対する保坂の考え方に興味を持った人、もっと詳しく知りたい人はぜひ読んで欲しい。小説が書かれる目的からテクニクまでを順序立てて、とても分かりやすく説明している。自作完成までの試行錯誤の跡を辿った「創作ノート」も付いている。

②に対して、保坂自身が「三十年後、五十年後も読まれるべき自分の小説はこれ」と言っているのを聞いたことがある。それぐらいの時間が経っても決して色褪せない小説。私たちが普段おぼろげに感じている、世界の連続性のようなものを見事に提示している。併録の「コーリング」が特に素晴らしい。

③は連載開始されたばかりの七年ぶりの小説。どこまで手荒に扱っても壊れないものか、小説という形式の頑強さを試しながら書いているような印象を私は持った。